メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐって（I）

A Consideration of Melville's *Redburn* and Its Only-Once-Used Phrase "wild Irish"（I）

福　士　久　夫

要　　旨

本稿は，メルヴィルの第４作『レッドバーン』に１度だけあらわれる「野蛮なアイルランド人（wild Irish）」という句の起源や来歴を求めて筆者がたどりついた，「野蛮なアイルランド人」という表現ないし類似の表現があらわれる諸文献及び関連諸文献を繙いて，玩味し学ぶ試みである。また，そのことを通じて，メルヴィルの『レッドバーン』という物語テキストを，メルヴィルが意図したかもしれないアイロニーや込めたかもしれないひそやかなニュアンスを読みとることを可能にしてくれるかもしれない，筆者がまだ気づいていない類の「歴史的連想」（メルヴィル）やアルージョンやコンテキストやアングルなどを発見しようとする試みである。

キーワード

アイルランド人表象，メルヴィル，「野蛮なアイルランド人」，『レッドバーン』

ハーマン・メルヴィルの小説第３作『マーディ』（1849）と第４作『レッドバーン』（1849）は，前者は主としてその第125章において，後者は全巻を通じて，アイルランドの歴史やアイルランド人／アイルランド人移民のことを主題的ないし集中的に扱い，メルヴィルが広い意味でのアイルランド／アイルランド人問題に強い関心を抱いていたことを窺わせる作品となっている。筆者の2021年の拙論（福士 2021）は，読み返してみると，遺憾

ながら，いろいろと欠陥が目立ち，文字通りの拙論と言うほかはないが，上記した２作品を対象にして，「アイルランド／アイルランド人／アイルランド人移民についてのメルヴィルの理解の範囲や，深度や，特徴点など」を明らかにし，また「メルヴィルがアイルランド／アイルランド人／アイルランド人移民をどのような言葉遣いで語っているかについて」も検討した（628）論文である。筆者はこの拙論において，以下のように書いた。「筆者は本稿の準備段階で，［『レッドバーン』の第47章で１度だけ使われている］「野蛮なアイルランド人」という表現もしくは類似の表現があらわれる，［福士 2021で検討した］レイバーンの著書［James G. Leyburn, *The Scotch-Irish: A Social History*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1962］以外に，数点の文献に目を通すことができたが，それらの紹介はここでは割愛する」（624）と。さて本稿は，主として，こうした「野蛮なアイルランド人」という表現もしくは類似の表現があらわれる諸文献にかかわる。筆者は上で言及した旧稿発表以後にも，「野蛮なアイルランド人」という表現ないし句があらわれる文献を求めて彷徨を続け，旧稿で上の一文を書いたときに念頭にあった数点の文献も含めて，かなり多数の文献にたどりつくことができた。本稿は，主としてこれらの文献――「主として」というのは，「wild Irish／野蛮なアイルランド人」という句はあらわれないものの，筆者としてこの間熱中してとりくんだ関連文献についても相当数とりあげるからである――を，「wild Irish／野蛮なアイルランド人」という表現ないし句があらわれる箇所を中心に繙いて，玩味し学ぶ試みである。そしてその狙いは，基本的には，メルヴィルの『レッドバーン』というテキストを，メルヴィルが意図したかもしれないアイロニーや込めたかもしれないひそやかなニュアンスを読みとることを可能にしてくれるかもしれない，筆者がまだ気づいていない類の「歴史的連想」（Merville 1969, 217〔Ch. 44〕）やアルージョンやコンテキストやアングルなどを発見するこ

とにある。本稿で扱う文献数は相当数に及ぶので，以下の本論においては，読みやすさと，１度述べたことにのちに再び言及するときの便宜のために，特定の単一の文献もしくは文献群ごとに，番号で節（セクション）を区切って論述することにしたい。同じ文献あるいは文献群を扱う節であっても，長くなりすぎる場合には，適宜節をあらためることとする。

1

上述した諸文献のしかるべき箇所を繙く前にいくつかのことを予備的に述べておかなければならない。まず，「野蛮なアイルランド人」という句が『レッドバーン』（Merville 1969）の第47章でどのように使われているのかを確認しておこう。

> ハイランダー号の［復路の］一等船客は全部で約15名だったが，貴族階級のこの隔離された領分への「**野蛮なアイルランド人**」移民客たちの蛮族のような侵入を防ぐために，メインマストの位置で［舷側から舷側まで］横にロープが張られていた。これが航海の料金として３ポンド払った者と20ギニー払った者を区別する境界線をなしていた。（Merville 1969, 242，強調はメルヴィル）

「「**野蛮なアイルランド人**」移民客たち」は「一等船客」の「貴族階級」の人びとと対比的に使われている。この括弧つきの強調をほどこされた一句は原文では「the “*wild Irish*”」であり，いかにもいわくありげである。『タイピー』，『白ジャケット』，『白鯨』などを読んでみればわかるように，メルヴィルはときに作中に，つまり，章の末尾などに，注を挿入する類の作家であるが，ここには注は付されていない。「「**野蛮なアイルランド人**」移民客たち」と書けば読者には理解してもらえる，あるいは，わかる読者

にはわかる，とメルヴィルは踏んでいたのであろう。もっともメルヴィルは，上掲の引用文からわかるように，「「**野蛮なアイルランド人**」移民客たち」という句を，「of」で，古代ギリシア人のいわゆるバルバロス（バルバロイ）や古代ローマ人のいわゆるバルバルス（バルバリ）に因源するとされる「barbarian (s)」の語を含む「the barbarian incursions（蛮族のような／野蛮な侵入）」という句と繋ぐことによって，「「**野蛮なアイルランド人**」移民客たち」の「一等船客」＝「貴族階級」の領分への侵入を，蛮族のローマ帝国への侵入になぞらえているという解釈を許容していると言えなくもない。だから，この「蛮族のような侵入」という句は，メルヴィルにしてみれば，案外，「野蛮なアイルランド人」という句の説明のつもりだったのかもしれない。（ローマ帝国に実際に侵入したいくつもの蛮族，侵入（侵略）の種々相，侵入（侵略）の諸結果などについては，トマス・クローウェルの『図説蛮族の歴史　世界史を変えた侵略者たち』を参照されたい。）とまれ，「野蛮なアイルランド人」という句の具体的な意味合い，ないしその歴史的，社会的，政治的，文化的なニュアンスを当初ほとんど理解していなかった筆者としては悩まされるばかりであったが，そのうちにこれを突き止めてやろうという気持ちが芽生えたというわけである。

『レッドバーン』には，この「野蛮なアイルランド人」というアイルランド人表象以外にも，かなりの数のアイルランド人表象や関連する表象があらわれる。それらのうちの主なものを以下でいくつか引くことにしたい。これらの『レッドバーン』にあらわれるアイルランド人表象が，のちに繙く「野蛮なアイルランド人」という句ないし類似の表現があらわれる諸文献や関連諸文献にあらわれるアイルランド人表象とどの程度に噛み合うのかを，あるいは前者が後者によってどの程度説明され得るのかなどを見るためである。そのさいの便宜のために，引用の末尾に丸で囲った番号を記す。

第12章に以下のくだりが見える。――「彼の名前は，前にも書いたように，ジャクソンであった。自分から私らにむかって，俺はニューオーリンズのジャクソン将軍の近親者だと言った。そして，まさかおめえたちの間に，この件に関して異論を唱えるやつはいめいなと恐ろしい剣幕でまくし立てた」（Merville 1969, 57）（①）。若干のコメントを記す。「ニューオーリンズのジャクソン将軍」とは，いわゆる1812年戦争末期に，ニューオーリンズの戦いにおいて，イギリス軍を相手にアメリカ軍を勝利に導き，軍名を馳せ，のちに大統領――第７代大統領（1829-37）――にまで上り詰めたアンドルー・ジャクソン（Andrew Jackson, 1767-1845）のことである。アンドルー・ジャクソンはアイルランド人移民を両親にもつアイルランド人移民の子である――アンドルー・ジャクソンの名前が出てくるのはここだけであり，彼がアイルランド人移民の子であるとは作中のどこにも書かれていない――ことは，当時の読者には知られていたであろう。とすれば，ここには「ニューオーリンズのジャクソン将軍」のイメージを借りた一定のアイルランド人表象が隠されていることになる。船乗り仲間たちのあいだで「暴君（tyrant）」（61）として知られる船乗りジャクソンの「俺はニューオーリンズのジャクソン将軍の近親者だ」という発言は多分に冗談臭いが，真に受けるなら，彼もアイルランド人の血を引いている可能性がある。（アンドルー・ジャクソンも一部の国民の間で暴君呼ばわりされ，顰蹙を買っていた。ナンシー・アイゼンバーグの第５章は，アンドルー・ジャクソンについてのあまり知られていないかもしれない事実をいくつも剔抉している。）また，この発言を離れても，「８歳のとき以来」（57）海に出て働いたという彼自身の言から，彼は底辺層の家庭の出であることを窺い知ることができるから，彼がアンドルー・ジャクソンが生きた時代（1767-1845）のアメリカで一般に底辺層を構成していたアイルランド人移民の家の出である可能性は否定しきれない。

第12章――「船乗りの１人で，目立って屈強で上機嫌の，アイルランド

のベルファスト出身の青年がいたが，彼は船乗り仲間のあいだで何ら注目を受ける人間でも影響力のある人間でもなかった。それどころか彼は，嘲られ，踏みにじられ，からかいと物笑いのタネにされた。そして，だれにも増してジャクソンによって，たえず罵倒され叱りとばされていた」(59)。「このベルファスト出身の男は，**有資格船員**（*able-seaman*）として乗組んでいたのだけれども，大した船乗りではなかった」(59)（②）。この引用についてもコメントを記す。「船一番の有能な船乗り」(57) であるにもかかわらず，今や「不治の病」(58)（「黄熱病」(56) かもしれない）のせいで，「人間の汚らしい澱，滓」(58) になりはてているジャクソンにしてみれば，そして，ジャクソンがアイルランド人であるとすれば，ますますということになるが，こんなみかけ倒しの，自分がアイルランド人であることに何の屈託も示すことのない輩にはガマンがならないというところであろう。

節をあらためて，アイルラン人表象があらわれていると考えられる箇所の引用を続ける。

2

第13章――船乗りになって海に出るということは，「人びとが奇妙な方言を喋り，奇妙な衣服を着，奇妙な家に住んでいる野蛮国（a barbarous country）に入って行くような」(65) ものである（③）。筆者には，これはアイルランド表象であるように思える。

第18章――船乗り仲間のジャック・ブラントは，「審判の日（the Day of Judgment）」(91) を信じているキリスト教徒らしいのだが，「あらゆる種類の呪術や魔法を信じていた。そして凪のときなどに順風をまねき寄せるために野蛮なアイルランドの言葉（some wild Irish words）をもぐもぐと唱えるのが常であった」(88)（④）。確たる証拠があるわけではないが，ジャック・ブラントは一応カトリックであったと考えられるのではないか。確たる証

拠があるわけではないのだから，ネガティヴな言い方になるが，もし『レッドバーン』の当時の読者の主流であったと考えられるプロテスタントの読者がこれをプロテスタントのキリスト教徒の描写であると受け止めたなら，猛反発したはずである。

第22章――「おまえ，そんなごたくをあの馬鹿げた夢判断の本から考え付いたんだろ，ちがうか。このちんぷんかんぷん野郎め」「天（heaven）のことなど俺に言うんじゃない――それは嘘だ――俺にはわかってんだ――それを信ずる奴はみんな馬鹿者だ。おい，このちんぷんかんぷん野郎，天に**おまえ**の居場所があるって，おまえは信じているのか。〔略〕止せよ，そんなたわごと！ 〔略〕人は死んで，１つの疾風からまた別の疾風へと移って行くだけなんだ，いいか，忘れるんじゃないぞ，このアイルランド生まれのコックニー野郎めが！」（104，強調はメルヴィル）（⑤）。

コメントを記す。これは惨めな生活を送っている船乗りたちも，天界では救われると口走ったジャック・ブラントに対するジャクソンの反発である。ジャクソンは「教会に行ったことがなかったし，キリスト教についてマレーの海賊と同然で何も知らな」い人物として，「自発性に発する無神論者であり不信心者」（104〔Ch. 22〕）として設定されているから，ジャクソンのキリスト教徒批判には遠慮会釈がない。「奴隷船に乗組ん」（57〔Ch. 12〕）でその地獄絵図を目の当たりにしたこともあるジャクソンにとって，人が「天」で救われるなどという言い種はまったくの「たわごと」でしかなかったのであろう。また，ここで，ジャクソンはアイルランド人かもしれないという仮説を介在させるならば，故国アイルランドにおいても，移民としても，アイルランド人庶民がおかれていた悲惨な窮状を当然知っていたはずのアイルランド生まれのジャックの，「天」で救われるなどとのうのうと言ってのける能天気ぶりには，ジャクソンはいっそうガマンがならなかったであろうということになる。（筆者の2020年の拙論（福士 2020）は，ジャク

ソンはメルヴィルの「仮面」，つまりメルヴィルのある種の本音のマウスピースであるという主張を含むものであった。）

第22章――ジャクソンは，「自発性に発する無神論者であり不信心者であった。長い夜直の折などに議論を吹っかけては，信ずるに値するものは何も無い，愛するに足るものは何も無い，生きるに値することも何も無いのだという自説を証明しようとした。彼は恐るべき絶望者（desperado）で，野蛮なインディアン（wild Indian）みたいであったが，実際彼は，皮膚が黄褐色で，頬骨の高いところがインディアンに似ていた。彼は天に対しても地に対しても突っかかろうとしているように思われた。彼は海上のカインであった。黄褐色の額に何か不可解な烙印が捺されていて，だれかれなしに近くにいる人間の心を腐らせていた」（104）（⑥）。ここでは，ジャクソンは当時の一般的な読者にとってはこの上なく否定的としか思えなかったはずのイメージを幾重にも付与されているが，本稿の問題視角からは，「野蛮なアイルランド人」いう句と同じ「野蛮な（wild）」という形容詞が用いられている「野蛮なインディアン」というイメージが注目される。

節をあらため，アイルランド人表象があらわれていると考えられる箇所の引用をなお続行する。

3

第27章――「「ここらでパット様（Pat）は綱を切ってとんずらだい！」そう言いながら，［その漁夫］はナイフで綱を切り，キルケニー（Kilkenny）人のようなにやにや笑いを浮かべながら，舵柄にとびつき，〔略〕さっさと私らの船から離れて行った。／「悪魔の野郎がおまえのあとを追いかけ，おまえが盗んだ麻綱でおまえを吊るし首にしてくれよう。この破落戸アイルランド人（you Irish blackguard）めが！」と航海士が叫んだ」（125）（⑦）。

このアイルランド人漁夫はアイルランド近海でハイランダー号が出くわ

した最初の現地のアイルランド人であるが，あざやかな「盗み」を披露してくれる。語り手は舌を巻いてこう言っている。「あのわれらの友人パット（Pat）のようなアイルランド人（Hibernians）がまだもっといるのなら，あのヤンキーの行商人（peddlers）にしても拍手喝采するがよろしかろうと私は考えた」（125）（⑧）。

第40章――「ブルンズウィック桟橋には，３王国（the three kingdoms）の各所を往復運航する〔略〕さまざまな黒い蒸気船が停泊している。ここに来ると，飢えるアイルランド（starving Ireland）から輸入された莫大な量の生産物が目に入る。ここへ来ると，甲板が牛や羊の檻に変えられているのがわかる。しばしば，これらの囲い柵と並んで，アイルランド人の３等船客がぎっしりと立ち尽くしていて，見たところ，家畜とまったく同じように檻の中に入れられているようである。ハイランダー号が入港したのは７月初めのことであったが，アイルランド人労働者が毎日何千人と来ていた。イングランドの穀物の収穫を手伝うためであった」（198）（⑨）。

第40章――「有名なドニブルック（Donnybrook）の棍棒を振り回す［これらの男たちは］，まるで蛮族（barbarians）の侵入であった。〔略〕／「**歌え，ランゴリー**（*Langolee*）**を，キラーニの湖**（*the Lakes of Killarney*）**を**」と１人の男が叫び，自分の棒を空中に放り投げ，群衆の先頭に立ってブロガン靴（brogans）で踊った」（198，強調はメルヴィル）（⑩）。

第40章――「合衆国やカナダの岸辺に毎年上陸する夥しい数のアイルランド移民のことを考え，そして驚いたことに，さらに同じ夥しい数の移民がリヴァプールから新オランダ（New Holland）へ向けて船出していくのを目撃し，また，こういったことにさらに加えて，これらの労働者の大群が，イナゴのように密集して，毎日イングランドの麦畑に降り立つのを目にしたとき，私はこの島［アイルランド］の肥沃さに舌を巻かざるをえなかった。というのも，この島は，たとえジャガイモの収穫は不足するとしても，

年ごとの人間の収穫を世界に送り込むことにかけては，一度も不足したことがないからである」(198-9)（⑪)。

第47章――「これらの移民船では，移民客は文明的な生活がそなえている最も基本的な〔略〕／これらの移民船のいくつかの船ではいまでも維持されている貴族政治は実に途方もないもので，結果的にきわめて恣意的な規則が実施され，移民客は最も神聖な後甲板の区域，すなわち船上で唯一の完璧に開放的なスペースに侵入することを阻止されている」(241-２)（⑫)。

第57章――「昼は一日中，夜は一晩中，数十人もの移民たちが，手当たり次第に食い物を探して甲板をうろつくようになった。鶏小屋を略奪し，盗んだ鶏は偽装して，みんなの炊事場で料理した。ロングボートの中の豚小屋にも侵入し，めぼしい若豚を盗み，**そいつを**生のまま喰らい，その死骸をあえて隠そうともしなかった。〔略〕コックの台所までも徘徊するようになり，コックもついには煮え湯のはいった柄杓で連中を威嚇した。〔略〕船首楼をうろつき，パン桶を盗んだし，通りの乞食のように水夫につきまとい，教会の名において一口食うものをくれとねだった」(284，強調はメルヴィル)（⑬)。

第57章――「とうとう，移民たちが極度の狂乱に駆り立てられるのを見て，ロシアの大帝王のリガ船長が，いまいちど勅令（ukase）を発した。いわく，移民のだれであれ，盗みの罪を犯した移民は，船乗りの場合と同様に，索具に縛り付け，鞭刑（flogging）に処するものとする。／この布告に対して，３等船室に隠密の動きが見られた。私などは船の安全を思うと心から震撼をしたが，とどのつまり，重大なことにならずにすんだ。〔略〕疑いもなく船長は，鞭刑のような酷烈な懲罰は500人の移民を激昂させ反乱にいたるかもしれないと考えたのだ」(284)（⑭)。

以上で，アイルランド人表象があらわれる箇所の引用を終える。

4

『レッドバーン』第47章の「野蛮なアイルランド人」の句に戻る。筆者の知る限りでのことだが，これまでのところ，この句に解説を加えたメルヴィル関連の論説を筆者は目にしたことがない。これも筆者の知る限りでのことになるが，そもそもメルヴィルの『レッドバーン』を論ずるアメリカ文学の研究者たちが，上で引いた第47章の一節を，「**野蛮なアイルランド人**」という句も含めて引用するのをあまり見たことがない。この，引用符付きの，イタリック体で強調されている句を引いたが最後，何らかの説明を余儀なくされ，厄介なことになると，彼ら彼女らは考えているのだろうか。「野蛮なアイルランド人」という句を含む「「**野蛮なアイルランド人**」の移民客たち」を引いている稀な例を，われわれはジョン・サムソンに見出すことができる。筆者は本書をこれまで何度か通読してきたが，今回は本稿のために『レッドバーン』の章を精細に読み返してみた。サムソンは，『レッドバーン』についての章である，「レセフェールのロマンス」と題された第 4 章において，以下のように書いている。

> 移民たちが蒙っていた抑圧的悲惨を助長する主たるメカニズムの 1 つは，もっぱら金銭（money）に基づいた厳格に実施されている階級制度（class system）である。「一等船室に陣どっている淑女たちと紳士たち」はありとあらゆる有利な条件を与えられている。〔略（福士による）〕他方，「移民客たちは文明的な住宅に備わっている最も基本的な設備からさえ遮断されている」［Merville 1969, 241（Ch. 47）］。ハイランダー号上では，移民客たちは，「貴族階級［一等船室の旅客たち〔サムソンによる補足〕］のこの隔離された領分への「**野蛮なアイルランド人**」移民客たちの蛮族のような侵入を防ぐ」［242］ために張られたロープに

よって文字通り遮断されているのだ。封建制のヒエラルキーと同じくらい厳格な，この階級制度が船上に存在するのは，ひとえに，移民客たちが20ギニーしか払えないのに，一等船室の客たちが３ポンド払うことができたからにほかならない。「そういったとんでもない状態が，こういった船の上で維持されている貴族政治というやつなんだ」[242]と，［主人公でもあり，語り手でもある（福士による補足）］レッドバーンは言う。(Samson, 119)

筆者としても，まずは賛成できる分析であるが，「**野蛮なアイルランド人**」という引用符で括られ，強調をほどこされた句自体については，なんの説明も加えていない。遺憾ながらサムソンは，この句が含まれている，われわれが１の冒頭ですでに確認ずみの，「貴族階級のこの隔離された領分への「**野蛮なアイルランド人**」移民客たちの蛮族のような侵入」という一節をそのまま引用しているにすぎない。

というわけで，以下において，筆者はかなりの数にのぼる「野蛮なアイルランド人」という表現ないし句があらわれる諸文献，ならびに，その表現が直接的にあらわれないものの，関連すると筆者が考える諸文献を，それらの文献からしかるべき箇所を引用して，玩味することにしたい。こうした諸文献を繙くと，以下で目の当たりにするように，多数の著作家（や著作物）が登場してくる。そして，これらの著作家たちをメルヴィルが読んだかどうか，あるいは直接的に読まずとも，間接的に知っていたかどうかは気になるところである。この点については，筆者は基本的に，一般にメルヴィル（1819–91）以前の著作家と同時代の著作家については，メルヴィルが一定の情報を得ていた可能性を否定すべきではないというスタンスである。メルヴィルが読んだということに関して一定の証拠を確認できる著作家や著作物については，メアリー・K・バーコーにリストアップされて

いるので，以下において，バーコーに拠って適宜確認することにしたい。（バーコーは1987年の出版であるから，「一定の証拠」とは，その時点までに，メルヴィルの「ソース」探求に関与した研究者たちによって提示された証拠ということである。バーコーはこれらの研究者たちのメルヴィルの「ソース」探しにかかわる論説もリストアップしている。）本稿は，メルヴィルに関しては，『レッドバーン』が基本的な対象テキストであるから，以下で検討する諸文献に出てくる著作家たちやその著作物を『レッドバーン』執筆時点までにメルヴィルが読んでいたか，あるいは知っていたかどうかという点にも留意する必要がある。しかし，この点については，筆者は準備不足であるから，あまり拘泥しないことにする。

5

まず，３つの文献，Web 上で参照することのできる“WILD IRISH | Meaning & Definition for UK English | Lexico.com”，中央大学図書館が提供しているデータベースの１つである“Oxford English Dictionary On Line”中の“wild Irish, n. : Oxford English Dictionary”，および『ケルト復興』に含まれている三好みゆき論文「イングランドにおけるケルト像――雑誌記事を中心に――」（『ケルト復興』：237-70）を見ることにしたい。

最初の２つは，Oxford English Dictionary（以下，OED とする）に関する文献であり，OED に「wild Irish」という句が，１つの entry として登載されていて，定義が与えられていることがわかる。“wild Irish, n.: Oxford English Dictionary”によれば，その定義はこうである。「もともとは，イングランドの支配の及んでいないアイルランドの諸地域に居住するゲール語を話すアイルランドの人びと（Irish people）」のこと。「それゆえにまた，（特にイングランド人によって）野蛮（uncivilized），原始的（primitive），あるいは手に負えない（unruly）と見做されたアイルランドの人びと」のことである。１つ

目の文献“WILD IRISH”も，当然ながら，今しがた見た“wild Irish, n.”と同一の定義を与えているが，「origin」の項に，「末期中英語。最も初期の用例は翻訳家のジョン・トレヴィサ（John Trevisa［c1342–？1402］）に見出される」と記している。また，「ポスト古典期ラテン語 silvestres Hibernici, plural と比較せよ」とあるから，トレヴィサの「(the) wild Irish」という英語表現はラテン語「silvestres Hibernici」の英訳語であったようだ。

三好みゆき論文は冒頭の２つ目の段落で，「［「ケルト」のイメージの］探求の出発点」として，OED によって，「「ケルト」という語の辞書的な定義を確認しておこう。一八五八年に計画されてから七〇年の歳月をかけて一九二八年に完成を見たこの大辞典は，まさに「ケルト復興」運動のあった時代の産物であるのだから」(237) と書き，論文の中頃で，「当時のケルトイメージを探るために，先程の『オックスフォード英語辞典』に採られている用例から「ケルト（の）」という語を含んだ文を拾い上げてみると，当時どのような言葉や概念が「ケルト」という語とともに用いられていたかを垣間見ることができる。それぞれの言葉の典型的な用例があげられているとすると，用例を収集した人たちが生きていた社会の「ケルト」に対する紋切り型のイメージが，ことに抵抗するアイルランド人に対する支配者側の容赦ないイメージが，浮かび上がってくるはずである」(251) としたうえで，OED の「ケルト（の）」にかかわる用例をたとえば以下のように分類整理して紹介している。

――「身体的特徴（「黒いケルトの典型的な見本である，もう一人の黒い顔つきのリードの田舎者」）」，「野蛮（「アイルランドは……太古のままのケルト人の野蛮状態」），「野蛮と飲酒と動物との類似（「獣のようなケルト人が，野蛮な意思で，酒に酔って眠りを牛飲するように」）」，「反抗心（「このタイプが成功者として幅をきかしているという事情が……彼のケルト族の胸に山ほどの謀反気を積み上げている」，「『事実の専制に対する不屈の反発』をもったケルト人の反逆心」，「ケルト人は

悪賢い復讐をする機会を何度も見つけた」，「策略も征服も，我が人種が最終的に勝利するというケルト人の固い信念を揺るがすことはできなかった」，「彼らはケルト人でアイルランドのローマ・カトリック教徒，卑しい不満分子，自分たち自身の問題を処理するさいに発言したいと思う者にすぎない」)」，「ゆきあたりばったりの性格と怠惰（「なりゆきまかせのケルト人にとっては無理のある，強制された勤勉の習慣」)」，「変わりやすい敏感な気質（「ケルト人種はまず何よりも感情の起伏が激しい」)」（251-２）。

最後に，上の三好の「用例を収集した人たちが生きていた社会の「ケルト」に対する紋切り型のイメージが，ことに抵抗するアイルランド人に対する支配者側の容赦ないイメージが，浮かび上がってくるはずである」という重要な指摘を念頭において，先の OED の「wild Irish」の定義に立ち返ってみるなら，三好の指摘は「wild Irish」定義についても適切であるように思える。三好はなぜだかこの「wild Irish」定義には論及していない。筆者が OED の「wild Irish」定義にたどりついたのは，比較的最近のことであり，その点はおのが不明としなければならないであろう。しかし，本稿で検討する文献の著者たちのほとんどは，OED 完成以後の世代に属する歴史家や研究者たちであるが，だれひとり，この「wild Irish」の OED 定義の存在を指摘し，読者にその参照を求める労をとっていない。

6

本節及び続くいくつかの節では，エドワード・D・スナイダーを検討する。本文献は，筆者の今回の「野蛮なアイルランド人」のという句の起源ないし来歴を探求する彷徨中にたどりついた諸文献のうちで，筆者の蒙を最も啓いてくれた文献である。この文献が発表されたのは1920年，つまり OED 完成以前であったことにも注目しておくべきであろう。本稿が検討する他の諸文献は，どれひとつとしてこのスナイダーの労作を参照していな

い。

スナイダー論文は，無題の序の部分，３つの節（セクション）――「I. NON-DRAMATIC PROSE」,「II. THE DRAMATISTS」,「III. THE POETS」――，そして「CONCLUSIONS」という構成をとっている。

スナイダーは「CONCLUSIONS」（Snyder, 718-25）の末尾近くで，みずからの論文の内容を概括して以下のように書いている。――「これまでの頁において，わたしは，ケルト人［民族］に対する，イングランド人の手になる多数のもっとも代表的な諷刺（satires）を検討してきた。わたしの分析は，もちろん，定性的なものだったのであり，定量的なものではなかったのだが，それでも，われわれが今日関心を寄せるこの偏見（prejudice）が，ジラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis,［c. 1146-c. 1223］）の時代からロマン主義運動の時代まで途切れることなく続いた伝統であったことを証明するに足るだけの数の諷刺の用例は検討されたと言ってよい。ケルト人に投げつけられた非難のいくつかは，同じくアイルランド人，ウェールズ人，及びスコットランド人にも向けられた。たとえば，残酷（cruelty），蛮性（barbarity），無知（ignorance），そして全般的な「野蛮性」（general “wildness”）などの非難である。具体的に言うなら，アイルランド人は彼らの堕落した家庭生活や一切の文明を欠如していることを理由に嘲弄された。ウェールズ人は，もっとも頻繁には，彼らの方言の奇癖，家系譜に対する裏付けを欠いた行き過ぎた誇りの念，結婚にかかわる慣習，食事の癖，彼らが交わっている聖職者たちの無知と貧困などを理由に攻撃された。スコットランド人に向けられた非難は，生まれながらの裏切り者という非難のように，しばしば政治的な非難であったとは言え，典型的なスコットランド人についてのイングランド人の観念をもっとも如実に表すのは，おそらくは，「頑迷な無知（bigoted ignorance）」という句であろう」（723-４）。スナイダーはこの最終節において，ケルト人に対する偏見を概括する表現とし

て，「the “wild Irish” idea」（724）と「the “wild Irish” tradition」（725）を用いている。

どうやらケルト人に対するイングランド人の「偏見」に先鞭をつけたらしいイングランド人は，ジラルドゥス・カンブレンシスというラテン語名を名乗る人物らしいから，次には，スナイダーがこのイングランド人について述べている箇所を見てみるべきであろうが，スナイダーは無題の序の部分で，ケルト人に対する「偏見」について概括的に論じているから，それを先に，節をあらためて見ることにしたい。

7

スナイダーは序の部分において次のように書いている。――「いかなるケルト復興であれ，そのもっとも興味深い特徴の１つは反ケルトの偏見であり，イングランド人のあいだでは，そうした復興運動はいつでもこの偏見によって妨げられている。アングロサクソンたちが長きにわたって「野蛮なアイルランド人」，スコットランド人，及びウェールズ人に向けてきたこの遍く見られる軽蔑的態度は１つの伝統になりおおせていて，しかもこの伝統はきわめて強力なものであるために，ときに，文学史に及ぼした影響力は相当に重大なものであったように思われる。たとえば，ロマン主義の運動においては，２つの力が働いていた。１つは，ケルト民族の歴史と神話の厖大な堆積物に光を当てる傾向であり，もう１つはそのような研究調査をすべて侮蔑し嘲笑する傾きである」（687）。**5** で検討した三好みゆき論文の指摘にあるように，OED の編纂者たちが身をおいていた時代は「「ケルト復興」の時代」であったが，スナイダーもこの時代に身をおいていたとおぼしい。

スナイダーはこうも書いている。――「「野蛮なアイルランド人」現象はケルト人史の１つの偏頗な書き方として，あるいは，アイルランド人の場

合であれ，スコットランド人の場合であれ，ウェールズ人の場合であれ，ケルト的なものは一切合切諷刺するという法外な欲望として定義しうるかもしれない。ときにこの現象は，明白に諷刺的な作品，かつ諷刺的なものとして受容される作品を生み出す。より頻繁に見られるのは，この現象が，諷刺の目的がより微妙で，それゆえそのことと即応して，より破壊的な効果をもつ作品にあらわれる場合である。数多のイングランドの著作家たちが，ケルト民族に有利な事実をすべて抑圧し，彼ら彼女らに不利に働くすべてのことを針小棒大化することに嬉々として勤しんできたのである」(687)。

スナイダーは「野蛮なアイルランド人（a wild Irishman）」という句そのもの」について以下のように書いている。――「「野蛮なアイルランド人」という句そのものは，もともとは，無学なアイルランド人の田舎者（*kern* or *woodkarne*）をしばしばイングランド系であった都市育ちの隣人と区別するというあたりまえの意図から用いられてきたものと思われる。しかし，諷刺の度合が途方もないものであるために，この用語はほどなくして，農民であれ，都会者であれ，だれかれの区別なく，すべてのアイルランド人に当てはめられるようになった」(688)。「「野蛮なアイルランド人」に対するこのような侮蔑的な態度が初めて明るみに出た正確な期日を決めようとしても難しいであろう。アリストテレス以来，ケルト人について，きわめて嫌味なことども――いくつかは真実であり，いくつかは偽りである――が言われてきたのである」(688)。

ここで，筆者の訳語について，コメントを付しておかなければならない。上で「アイルランド人の田舎者」と訳した原語「*kern*」は，手元の『リーダーズ英和辞典』（第３版）でも調べのつく語で，それによると，「アイルランド人の百姓」とも訳せるし，「［古代アイルランドの］軽歩兵」とも訳せる。「都市育ちの隣人」と対比されているところから，「アイルランド人の

田舎者」を選んだのだが，「軽歩兵」と訳す方がいいのかもしれない。本稿がのちに検討するデーヴィッド・ビアズ・クインには１頁大の図版24葉が収められていて，そのうち，キャプションに「kern」という語が含まれている図版は４葉である。これら４葉の図版のうち３葉の図版において，「kern」と思しい人物は，剣などの武器を手にしている。それゆえ，「*kern*」は「軽歩兵」の意で使われているのかもしれない。もう１点，「アリストテレス以来，ケルト人について，きわめて嫌味なことども」云々のくだりについてもコメントしておきたい。スナイダーの注の指示にしたがって，該当箇所，すなわち，アリストテレスの『政治学』第２巻第９章を岩波文庫版で読んでみると，以下のようであった。「実際，女たちは凡ゆる種類の放縦をこととし，贅沢三昧に暮らしているのである。従ってこうした国制においては必然に富が尊重されることになる。そしてこのことは軍人的で好戦的な種類の多くのもののように，女たちに御せられているところでは，特にそうである。（ただしケルトイ人たちやその他，男性相互の［性的］交渉を公然と尊重している人々にあっては別である）」（102）。しかし，スナイダーは，アリストテレスのこの論述に関して，どのあたりが「真実」で，どのあたりが「誤り」であるなどと，具体的に腑分けしてみせているわけではない。

スナイダーからの引用を続ける。――「たしかにジラルドゥス・カンブレンシスの時代から今日に至るまで，反ケルトの偏見は１人の著作家から別の著作家へと伝えられてきたのであり，ついにはほとんど自己増殖的なものとなった」（688-９）。「今日においてさえわれわれは，ある愚かな男についての話を語る学校へ通う生徒が，無思慮にも自分の話の主人公を「パット」とか「マイク」とかと呼ぶときには，また，『口で言えないほどひどいスコットランド人』や『二枚舌のウェールズ人』といった本の大売り出しが行われるときには，当の伝統が今でもなお生きているのだということを思い知るのである」（689）。「パット」や「マイク」などの，アイルラン

ド人を当てこする仇名については，ジョン・コーベットが詳しい。

スナイダーはこうも書いている。――「「野蛮なアイルランド人」という侮辱的な用語が14世紀以来一般に用いられてきているということは〔略〕心に留めおくに値する」(689)。「イングランド人のあいだで［アイルランド人を「野蛮なアイルランド人」と呼ぶ］伝統が行われるようになった［正確な］期日（days）を言うことが可能である〔略〕限りでのことになるが，われわれとしては，「野蛮なアイルランド人」という観念は最初は12世紀遅くにはっきりとした形をとり，そして今日においても相も変わらず使われつづけていると言ってよい」(689)。

8

次に，「I. NON-DRAMATIC PROSE」中の，ジラルドゥス・カンブレンシスの「反ケルト偏見」を検討した箇所を具体的に見ることにする。(『リーダーズ英和辞典』第3版によれば，Giraldus Cambrensis（ジラルドゥス・カンブレンシス，c. 1146-c. 1223）は宮廷付き司祭であった。John 王子の指導係となり，1158年 John 王子に随行してアイルランドを訪れた。アイルランドに関する2冊のラテン語による著作などを残した。)

スナイダーは，「消極的な言い方になるが，ケルト人史を書くときのイングランド人のバイアスの強さは，さまざまな著作家たちがそれに異議を唱えたときのその激しさによって説明しうるかもしれない」(690）とした上で，次のように書いている。――「1662年にジョン・リンチ（John Lynch）は『Cambrensis Eversus (転覆されたカンブレンシス)』というタイトルで，主たる目的がジラルドゥス・カンブレンシスの［アイルランド／人に対する］数々の中傷を挫くことにある論説を出版した。リンチが言うには，カンブレンシスは全アイルランド人に対して口汚い誹謗中傷を吐きちらし，年端の行かぬ子供に対しても，女性に対しても，遠慮会釈がなかった。カンブ

レンシスは国民全体を嘲笑し，貴族たちを中傷し，牧師たちをとがめだてし，高位聖職者たちを傷つけ，現場の戦いの教会（the church militant）に致命的な口撃を加え，その中傷を，アイルランドの聖人たちに対抗して，天の法廷にまで投げつけた」(690)。

スナイダーはジラルドゥス・カンブレンシスを以下のように評価している。――「12世紀のもっとも有能な書き手の１人であるジラルドゥス・カンブレンシスは，全権力者に対して屈従的なお世辞を使うことによって，イングランド宮廷と聖職者界において，出世を勝ち取ることを主たる目標に据えていた。明らかにこの目標を果たすことを望んで，彼はアイルランドとウェールズについてのラテン語による作品を，ケルト人についてのもっともうとましく，もっとも馬鹿げたストーリーで満たした。これらの野蛮人たち（barbarians）の蛮性をイングランド人の洗練された文明と対比する労を頻繁に払いながら。ジラルドゥスの中傷，特にアイルランド人に対する中傷には際限がないように思われる。彼はもっとも忌まわしい性的な倒錯をありふれた日常的な出来事として扱い，引用に堪えないようなストーリーを頻々と口にする」(692)。

その上でスナイダーは，トマス・ライト（Thomas Wright）の『Historical Works of Giraldus Cambrensis.....』（London, 1881）によるジラルドゥス・カンブレンシスの英訳から以下を引いている。――「アイルランド人は粗野な（rude）な国民，畜牛の産物だけで暮らしを立て，獣のように生きている――牧畜生活の原始的な習慣からまだ抜け出していない国民である。／彼らは他のどんな国民よりも裏切りに走りやすく，誓いを立てた約束をけっして守ることはない〔略（福士）〕」(692)。そしてスナイダーは，ジラルドゥス・カンブレンシスのラテン語の著作を総括してこう書いている。「『Topographia Hiberniae（アイルランドの地誌）』は1187年に完成され，他の３冊の作品はその後完成された。これらの作品はそれらを読んだすべての

人々に深甚な印象をもたらし，彼らに「野蛮なアイルランド人」を同じような手口で扱わせる点で強い間接的な影響力をもったように思われる」(695)。

次に，節をあらためて，スナイダーが，ジラルドゥス・カンブレンシスの作品を読んだ人々に与えた影響を指摘，分析している箇所をいくつか引いて検討することにする。

9

スナイダーは，「Shakespeare をはじめとする多くのエリザベス朝劇作家に題材を提供した」(『リーダーズ英和辞典』) とされるホリンシェッドの『年代記 (Chronicles)』についてこう書いている。「ホリンシェッドの『年代記』に書き込まれているアイルランドのもろもろの歴史はすべて，辛辣なあるいは侮蔑的な党派心の精神でもって書かれ，可能な場合にはいつでも，ジラルドゥスをソースとして用いている」(695)。

スナイダーは，「イングランドの古物研究家・歴史家」で，「イングランド初の総合的な風俗史 *Britannia* (1586) を著した」(『リーダーズ英和辞典』) とされるウィリアム・キャムデン (William Camden, 1551–1623) については，以下のように書いている。――「ウィリアム・キャムデンは，アイルランド人の「野蛮性 (wildness)」の観念の拡散に果たした重要な役割の点で，ジラルドゥスとほとんど互角の位置にある。最初は1586年にラテン語で出版された彼の『ブリタニア (Britannia)』は長いあいだブリテン諸島の歴史と関連する一切合切についてのスタンダードな作品とみなされた。ロンドンの主教 (Lord Bishop) であるエドマンド・ギブソン (Edmund Gibson) が1695年に英訳を出版した (この英訳は浩瀚で高価な書物であったにもかかわらず，1772年までにすでに第 4 版が出ていた) あと，当作は世間の受けがいっそう増大し，以前にも増して頻繁に引用された」(696–7)。そしてスナイダーは続けて

「キャムデンの手になる驚くべき言明のいくつかは以下の通りである」(697) として，1772年の英語版から長い引用をしているが，われわれはそのほんの一部のみを引く。――「強盗をはたらくことは恥ずべきことだと考えられてはいない。国中のあらゆる場所で残酷な強盗が行われている」(697)。「アイルランド人は，暴力，強盗，殺人も，神にとって不快なことだとは考えていない」(697)。「これらの野蛮なアイルランド人（wild Irish）のあいだには，神聖なことがらは何ひとつない」(697)。

ホリンシェッドもキャムデンも，バーコーのリストに見当たらない。

10

本節では，スナイダーがスペンサー（Edmund Spenser, c. 1552–99）の『アイルランド現状管見（View of the Present State of Ireland)』とバートン（Robert Burton, 1577–1640）の『憂鬱の解剖（Anatomy of Melancholy)』（1621）におけるそれぞれのアイルランド／アイルランド人観を検討した箇所を見る。バーコーによれば，スペンサーについては，メルヴィルは Robert Anderson 編の『Poets of Great Britain』（London and Edinburgh, 1792–93）の「vol. 2」で読んだという確たる証拠があるし，スペンサーの名前は，処女作『タイピー』以前の若書き「Fragments from a Writing Desk, No. 2」に早くも出てくるが，メルヴィルが『アイルランド現状管見』を読んだかどうかは不明。バートンの『憂鬱の解剖』については，メルヴィルは『The Anatomy of Melancholy』（New York: Willey, 1847）を読んだ。バートンの名前は，『マーディ』(1849)，『レッドバーン』(1849)，『白鯨』(1851)，『詐欺師』(1857) などにそれぞれ複数回あらわれる。

スナイダーは前者について以下のように書いている。――「スペンサーの［1633年死後出版された（スナイダーの注〔698 n. 1〕に従った福士による補足)］『アイルランド現状管見（View of the Present State of Ireland)』は，1人

の教養あるイングランド人の目に映ったアイルランド人の国民的弱点を強力なリアリズムで提示している。スペンサーはイングランドの宮廷で重要な役割を果たしたいという野心を抱いていたにもかかわらず，生涯の大半をアイルランドで過ごすことを余儀なくされた。〔以下，略（福士）〕」（698）。

スナイダーは続けて，「多くの同時代者たちと同様に，スペンサーは実際に「野蛮なアイルランド人（wild Irish）」という句を用いている。代表的な一節は軽歩兵（*kern*）を描写した一節である」（698）とし，以下を引いている。（スナイダーの注（698 n. 2）によれば，引用は「the ed. of 1805, VIII, 382」からである。）――「いやはや，そうした状態は，（私の思うに）地上のあらゆる人びとのうちで最も野蛮で最も忌まわしい状態なんだ。というのも，彼ら［軽歩兵たち］は歩兵としての経歴を歩み始めたときから，考えられるありとあらゆる獣じみた行動をとるんだからね。彼らはあらゆる人間を虐げる。つまり彼らは敵ばかりではなく家来をも殺すのだ。彼らは盗むし，残酷で，むごたらしい。復讐心に富み，喜び勇んで処刑をおこない，放埒に耽り，悪態をつき，神をなみし，女の凌辱はありふれた行為だし，子供を殺すのも憚らないんだ」（698）。（スナイダーの注698 n. 2 and 3によれば，「野蛮なアイルランド人」という句は「the ed. of 1805, VIII, 382」からであり，後者の長い一節は「*Ibid*., p. 392」からである。注の記述はこれだけであり，「the ed. of 1805, VIII」の詳細は不明である。）

次に，バートンを検討している箇所を見る。スナイダーは，「それ自体としてはあまり重要ではないが，アイルランド人は「野蛮である」（Irish “wildness”）とする考え方がとても普遍的なものになっていたことを物語るのは，バートンの『憂鬱の解剖』［1621］に見える2つの短いくだりである」（699）として，以下を引いている。――「モスクワ大公国人は，自分の妻に疑いをかける場合には，口を割るまで打擲するのを常とする。そして打擲が奏功しないときには，あの野蛮なアイルランド人（those wild Irish）

のように，自分の思いのままに離婚するか，さもなければ，昔のガリア人たちがかつてそうしたように，妻の頭を強打した」（699）。「……〔スナイダーによる省略〕きわめて迷信深い，われわれの野蛮なアイルランド人（our wild Irish）に似て」（699）。

11

スナイダーは「I. NON-DRAMATIC PROSE」において，エドワード・ウォード（Edward Ward, 1667-1731）が自身の『The London Spy』（ca. 1700）に掲載した『The Character of an Irishman』の最後の一文を引いているのだが，われわれもそれを引いて読んでみることにする。（Ward については，『リーダーズ英和辞典』第３版に最小限の説明を見出すことができる。）――「結論として言うなら，彼は自分の国では臆病者，イングランドでは好色な種馬，フランスでは優雅な振舞の従僕，フランドルでは良き兵士，そしてわが国の西方の植民地では高価な奴隷というわけだ。なにしろ，植民地では，彼らは**白いニグロ**（*White Negroes*）という不面目な蔑称で区別されているんだからね」（Snyder, 700，強調は原著者）。バーコーによれば，『レッドバーン』に続いて出版された『白ジャケット』に，メルヴィルがウォードの『The Wooden World Dissected in the Character of: I. A Ship of War［etc.］』（1707）を読んだかもしれないという不確かな証拠が見出されるとのことである。

本引用を読むと，アイルランド人が17世紀の末期に，アイルランド，イングランドも含む各国においてどのような人間であると見られていたかがわかるし，また「植民地」，すなわちイングランドの北米植民地では「白いニグロ」と呼ばれ，ウォードがそれを「不面目な蔑称（Ignominious Epithet）」としていたことがわかり，興味ぶかい。堀越智の『アイルランドの反乱』はサブタイトルが「白いニグロは叫ぶ」となっていて，筆者は興味を引かれて読んでみたのであるが，残念なことに，このサブタイトルについての

説明はどこにも書かれていない。アイルランド人を「白いニグロ」と呼ぶことは，著者の頭の中では，本書刊行当時――本書の刊行は1970年である――あたりまえの通念だったのかもしれない。

12

本節はスナイダーを検討する最後の節である。スナイダーは「Ｉ.」節の最後のパラグラフで次のように書いている。――「アフラ・ベーン（Aphra Behn）夫人の，われわれの言語で書かれた最初の「作者の意図をもりこんだ小説」としてしばしば取り沙汰される『オルーノコ（Oroonoko）』では，著者は「１人の**法廷弁護士**，すなわち１人の野蛮な**アイルランド人**（a wild *Irish* man）」［強調はベーン］というよく知られた句を用いかつそれについて語っている。本研究は英語小説（the English Novel）が本当の意味で姿をあらわす以前の1700年までを対象とする研究であるから，私としては，18世紀に書かれた小説群の入念な研究が本研究が対象にしている［反ケルト人の］伝統の続行を示すことになるであろうと推察して自足しなければならない。たしかにフィールディング（［Henry］Fielding）は，『トム・ジョーンズ（Tom Jones）』［1749］［スナイダーの注によれば，第11巻，第４章］において，「純然たる野蛮なアイルランド人（an absolute wild Irishman）」について語っているし，スモーレット（［Tobias］Smollett）は，「『ロデリック・ランドム（Roderick Random）』［1748］において１人のスコットランド人と１人のウェールズ人に頁を割いている。後者のウェールズ人は『ペリグリン・ピクル（Peregrine Pickle）』［1751］の第34章に再登場する」（702）。

ベーンはバーコーのソースリストにはあらわれない。フィールディングの『トム・ジョーンズ』については，メルヴィルは『ピエール』（1852）の執筆時点までに読んでいる。そして，スモーレットの前者については，『オムー』（1847）の執筆時点までに読んでいるし，後者については，『白ジャ

ケット』（1850）執筆時点までに読んでいる。

スナイダーは「II.」節の冒頭のパラグラフでこう書いている。――「たいていの場合，演劇の舞台上でケルト人に向けられるからかいは気のいいものであり，演劇以外の場合のケルト人に対するサタイヤの辛辣さと比べると愉快なものである。シェイクスピアはこのこととの関連においては最も重要な作家であるように思われるが，その理由は，彼の大人気にあるだけではなく，彼がケルト人のことを仄めかす頻度にもあるであろう。シェイクスピアはアイルランド人の軽歩兵（the Irish kerns）（彼は彼らについてホリンシェッドやその他で読んだ）にさまざまに言及している。たしかに短い言及ではあるが，けっして好意的なものではない」（702- 3）。スナイダーはこれに続けて，ほぼ1頁強にわたって，シェイクスピアの種々の作品――『リチャード二世』，『ヘンリー五世』，『ヘンリー六世　第二部』，『マクベス』，『間違いの喜劇』，『ウィンザーの陽気な女房たち』，『ヘンリー四世　第一部』――を論じ，さらにそのあとで，ミドルトン（[Thomas] Middleton, [1570 ? -1627]），ウェブスター（[John] Webster, [1580 ? - ? 1625），デッカー（[Thomas] Dekker, [1572 ? - ? 1632），ベン・ジョンソン（Ben Jonson, [1572-1637）などを論じている。スナイダーの「III.」節については，ここでは全面的に割愛する。

メルヴィルは上に出てくるシェイクスピアをはじめとする劇作家たちをどの程度読んでいたであろうか。バーコーによれば，メルヴィルは『The Dramatic Works of William Shakespeare; with a Life of the Poets, and Notes, Original and Selected』（Boston: Hillard, Gray, & Co., 1837）などを早くから読んでいた。シェイクスピアの名前は早くも処女作『タイピー』（1846）に出てくる。ミドルトンの名前はバーコーのリストに見当たらない。デッカーについては，『白ジャケット』執筆時点までに『Old Fortunatus』（1600）を読んでいる。ウェブスターについては，『The White Divel』（1612；Divel はママ）を『Battle-Pieces and Aspects of the War』（1866）執筆時点までに読ん

でいる。ベン・ジョンソンについては，『The Works of Ben Jonson.....〔福士による省略〕』（London, Herringman［etc.］, 1692）を『白ジャケット』（1850）執筆時点までに読んだようだ。

（「メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド」という句をめぐって（II）」に続く。）

付　記

本研究はJSPS科研費JP19K00428の助成を受けたものである。また，筆者が加えていただいている中央大学人文科学研究所の「現代アメリカの言語と文化」チームの主査加藤木能文氏には資料の収集その他で大変お世話になった。記して謝意を表したい。

引用文献

［以下において，翻訳書であって，原典が英語あるいは独語で書かれたものである場合，（　）内に原典名を示す。また，その末尾に［非］とある場合，筆者は原典を参照していないことを示す。］

アリストテレス（山本光雄訳）『政治学』岩波文庫，山本光雄訳，1961年。

岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』，世界史リブレット115，山川出版社，2010年。

ウェスト，コーネル（村山淳彦・堀智弘・権田建二訳）『哲学を回避するアメリカ知識人―プラグマティズムの系譜』未來社，2014年。

上野格／森ありさ／勝田俊輔編『世界歴史大系　アイルランド史』山川出版社，2018年。

大野真弓編『イギリス史（新版）』山川出版社，1979年，第4版。

カヒル，トマス（森夏樹訳）『聖者と学僧の島―文明の灯を守ったアイルランド』。青土社，1997年。（Thomas Cahill. *How the Irish Saved Civilization: The Untold Story of Ireland's Heroic Role from the Fall of Rome to the Rise of Medieval Europe.* London: Hodder & Stoughton, 1995, 2018.）

カンブレンシス，ギラルドゥス（有光秀行訳）『アイルランド地誌』青土社，1996年。

クローウェル，トマス（蔵持不三也監訳，伊藤綺訳）『図説蛮族の歴史　世界史を変えた侵略者たち』株式会社原書房，2009年。（Thomas J. Craughwell, *How the Barbarian Invasions Shaped the Modern World: The Vikings, Vandals, Huns,*

Mongols, Goths, and Tartars Who Razed the Old World and Formed the New. Fair Winds Press, 2008.［非］）

鈴木良平『アイルランド問題とは何か―イギリスとの闘争，そして和平へ』丸善ライブラリー，2000年。

スマウト，T. C.（木村正俊監訳）『スコットランド国民の歴史』原書房，2010年。（T. C. Smout, *A History of the Scottish People* 1500–1830. William Collins Sons & Co Ltd, 1969.［非］）

竹田英尚『文明と野蛮のディスクール―異文化支配の思想史（I）―』ミネルヴァ書房，2000年。

―――『キリスト教のディスクール―異文化支配の思想史（II）―』ミネルヴァ書房，2000年。

中央大学人文科学研究所編『ケルト復興』中央大学出版部，2001年。

飛田茂雄訳「アメリカ合衆国憲法」，飛田茂雄編著『現代英米情報辞典』研究社出版，2000年：1187–1238。

富田虎男「北米植民地」『岩波講座　世界歴史16　近代世界の形成 III』，岩波書店，1970年：234–292。

福士久夫「メルヴィルの労働大衆」アメ労労働編集委員会編『文学・労働・アメリカ』南雲堂フェニックス，2010年：59–96。

―――「「島めぐり移動シンポジウム」と革命の主題―『マーディ再訪』」アメ労編集委員会編著『アメリカ文学と革命』英宝社，2016年：87–128。

―――「視点，アイロニー，コンテキスト，歴史，そしてジャクソン―メルヴィルの『レッドバーン』を再考する」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第96号，2020年：371–403。

―――「アイルランド／アイルランド人／アイルランド人移民とハーマン・メルヴィル」『中央大学経済研究所年報』第53号（I），2021年：597–629。

ヘルム，ゲルハルト（関楠生訳）『ケルト人』河出書房新社，1999年（新装新版），1979年（初版）。（Gerhard Herm, *Die Kelten*, Econ Verlag, 1975.［非］）

堀越智『アイルランドの反乱―白いニグロは叫ぶ』三省堂，1970年。

マーシャル，P. J.／G・ウィリアムズ（大久保桂子訳）『野蛮の博物誌―18世紀イギリスがみた世界』平凡社，1989年。（P. J. Marshall and Glynder Williams, *Great Map of Mankind: British Perceptions of the World in the Age of Enlightenment*. London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1982.［非］）

水野眞理「翻訳『1596年，エドマンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニーアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見（２）』」，『英文学評論』，76（2004）：149–181。（https://doi.org/10.14989/RevEL_90_１）

———「『アイルランド管見』はどう読まれてきたか—ウェアから集注版まで」，『英米文学評論』90（2018）：1 –21。（https://doi.org/10.14989/RevEL_76_149）

ミラー，カービー／ポール・ワグナー（茂木健訳）『アイルランドからアメリカへ—700万アイルランド人移民の物語』東京創元社，1998。（Kerby Miller and Paul Wagner, *Out of Ireland: The Story of Irish Emigration to America*, Robert Rinehart Publishers, 1994.［非］）

ローディガー，デイヴィッド・R.（小原豊志／竹中興慈／井川眞砂／落合明子訳）『アメリカにおける白人意識の構築—労働者階級の形成と人種』明石書店，2006。（David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*, Revised Edition, New York: Verso, 1991, 1999.）

Allen, Theodore W. *The Invention of the White Race: Volume I: Racial Oppression and Social Control.* New York: Verso, 2012（Second Edition, Introduction by Jeffrey B. Perry; First published by Verso 1994）.

Allen, Theodore W. *The Invention of the White Race: Volume II: The Origin of Racial Oppression in Anglo-America.* New York: Verso, 2012（Second Edition, Introduction by Jeffrey B. Perry; First published by Verso 1997）.

Bercaw, Mary K. *Melville's Sources.* Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1987.

Bremer, Francis J. *John Winthrop: America's Forgotten Founding Father.* New York: Oxford University Press, 2003.

Cahill, Thomas. *How the Irish Saved Civilization: The Untold Story of Ireland of Ireland's Heroic Role from the Fall of Rome to the Rise of Medieval Europe.* London: Hodder & Stoughton, 1995, 2018.

Canny, Nicholas P. "The Ideology of English Colonization: From Ireland to America," *The William and Mary Quarterly*, The Third Series, Vol. XXX, Number 1, January 1973: 575–598.

Canny, Nicholas P. *The Elizabethan Conquest of Ireland: A Pattern Established 1565–1576.* Hassocks, Sussex: The Harvester Press, 1976.

Carter II, Edward C. "A "Wild Irishman" under Every Federalist's Bed: Naturalization in Philadelphia, 1789–1806", *Preceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 133, No. 2 (06/1989): 178–189.（https://journals.psu.edu）

Cave, Alfred A. "Richard Hakluyt's Savages: The Influence of 16th Century Travel Narratives on English Indian Policy in North America," *International Social Science Review*, Volume 60, Number 1, Winter 1985: 3 –24.

Corbett, John. "Terminology and the evolution of linguistic prejudice: The

conceptual domain of 'Irishness' in the *Historical Thesaurus of English* and the *Hansard Corpus of British Parliamentary Speeches*"（*TradTerm,* Sao Paulo, v.37, n. 2, Janeiro/2021: 515–537）.（https://doi.org/10.11606/issn.2317–9511.v37i0p515–537）

Grenier, John. *The First Way of War: American War Making on the Frontier, 1607–1814.* New York: Cambridge University Press, 2005.

Hirota, Hidetaka. *Expelling the Poor: Atlantic Seaboard States and the Nineteenth-Century Origins of American Immigration Policy*. New York: Oxford University Press, 2017.

Ignatiev, Noel. *How the Irish Became White*. New York: Routledge, 1995.

Isenberg, Nancy. *White Trash: The 400–Year Untold History of Class in America*. New York: Penguin Books, 2016, 2017.

Leyburn, James G. *The Scotch Irish: A Social History.* Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1962.

Matterson, Stephen. "Indian-Hater, Wild Man: Melville's *Confidence–Man*," *Arizona Quarterly* Vol. 52, No. 2, Summer 1996: 21–35.

Melville, Herman. *Redburn*. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1969.

Melville, Herman. *Typee, Omoo, Mardi*. New York: The Library of America, 1982.

———. *Redburn, White-Jacket, Moby-Dick*. New York: The Library of America, 1983.

———. *Pierre, Israel Potter, The Piazza Tales, The Confidence-Man. Uncollected Prose, Billy Budd*. New York: 1984.

Miller, John C. *Crisis in Freedom: The Alien and Sedition Acts.* Boston: Little, Brown and Company, 1951.

Oberg, Michael Leroy. *Dominion & Civility: English Imperialism & Native America, 1585–1685.* Ithaca: Cornell University Press, 1999.

Painter, Nell Irvin. *The History of White People*. New York: W.W. Norton & Company, 2011.

Quinn, David Beers. *The Elizabethans and the Irish*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1966.

Samson, John. *White Lies: Melville's Narratives of Facts*. Ithaca, New York: Cornell University Press. 1989.

Snyder, Edward D. "The Wild Irish: A Study of Some English Satires against the Irish, Scots, and Welsh." *Modern Philology,* Vol. 17, No. 12 （Apr., 1920 ）: 687–725.（https://www.jstor.org/stable/432834）

Webb, Jim. *Born Fighting: How the Scots-Irish Shaped America*. New York: Broadway Books, 2004, 2007.

"WILD IRISH | Meaning & Definition for UK English | Lexico.com" (https://www.lexico.com/definition/wild_irish).

"wild Irish, n. : Oxford English Dictionary," "Oxford English Dictionary On Line."